

立命館大学校友会 東日本大震災 東北応援ツアー レポート

「現地を訪問して想うこと」

B宮城県コース参加

川瀬勝彦（1967年文学部卒）

1年8か月近くが過ぎ、想像以上にきれいに整備されていたという思いと、想像以上に震災の爪あとはひどかったという思いが交錯しました。被災地は、ほとんどがバスの窓から垣間見るだけでしたが、降り立った南三陸町の防災対策庁舎のあとには、テレビで何度となく見ていたのに、強い衝撃を受けました。単に平面ではなく、三次元、そして空気感も加味されていたからに違いありません。

被災地の校友の話も衝撃でした。私は、「絆」という言葉があまりに軽々しく使われるので嫌いでした。しかし、彼の話聞いて、絆という言葉を一っさい使わなかったのにもかかわらず、家族の、仕事仲間の、地域の人たちとの絆をしっかりと感じました。

今度のツアーは、明るい未来を予感させてくれました。前向きな被災地の校友たち、そしてツアーの参加者たち。実は、ツアーの参加者は、私たちのようなシルバーエイジがほとんどかと思っていました。ところが、2000年以降に卒業の若い校友が3分の1以上もいたのです。政治も経済も閉塞感が充満している中で、私の気持ちはとても明るくなりました。

この震災を風化させてはいけないと考えます。それができるのは、被災地の人ではなく私たちかもしれません。そんなことを感じたツアーでした。